関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

神宮皇学館大学予科の教育

著者	本山 幸彦
雑誌名	教育科学セミナリー
巻	42
ページ	71-73
発行年	2011-03
その他のタイトル	Education in preparatory department of Jingu-Kogakkan in wartime
URL	http://hdl.handle.net/10112/4868

神宮皇学館大学予科の教育

本　山　幸　彦

〔解説・田中欣和〕

本山幸彦先生は京都大学停年退官後、本学教育学科に７年間在職され、教育学の博士課程創設の中心となられた。近代日本の教育史・政治史での多くのすぐれた業績で知られている。86歳になられた昨年にも『吉田松陰』を著わされた。昨今の松陰讃美の風潮を放置できない思いがあったという。益々さかんな研究意欲と表現意欲に頭を下げるしかない。

先生は官立神宮皇学館大学予科から軍隊体験を経て京都帝大に進まれた。神宮皇学館（現在の私立・皇学館大学と直接の関係はない）といえば皇道主義教育の本拠地と一般に理解されているし、占領軍の「神道指令」によって廃止された。しかし、先生のお話では、学生生活の実相からいえば、皇道一色にぬりつぶされていた訳ではないという。戦中教育の批判的把握は重要であるからこそ、単純な理解を超えるためにも、そこに生きた人々のリアリティを伝えていただきたいとお願いした。

ここに一冊の公刊された「日記」がある。『倉田山日記抄』という。神宮皇学館大学（以後神皇大と略称）第一期生正井光張氏（故人）が、大学の創設から廃止にいたる６年間の公的な学校生活を、克明に記録した貴重なものである。

私がここに書こうとするのは、70年も昔の生活（教育）であり、すでに記憶もうすれている。忘れたことも少くない。私はこの「日記」によって私の記憶を補い、私が在学していた当時の予科の教育を再現することを許されたい。

神皇大の前身神宮皇学館は、明治15（1882）年に伊勢神宮附属の神宮教育機関として創設され、明治36（1903）年に内務省所管の神職養成を目的とする官立神宮皇学館となる。そして、最後に昭和15（1940）年４月、文科系単科大学、文部省所管の官立神宮皇学館大学に昇格、予科を設置した。所在地は三重県の伊勢市である。

私は第三期生として昭和17（1942）年４月、７倍の難関を突破して予科に入学。19（1944）年９月に予科を修了、翌月入隊し、中国に派遣された。予科は２クラス、１クラス30人。規模は小さい。その教育は旧制高校に準じ、全寮制であった。私たちは学校の勉強より、哲学や世界文学を読みあさり、弊衣破帽、朴歯の下駄で宇治山田（伊勢市）の町を闊歩した。世は太平洋戦争が敗戦に転ずる時代であり、軍国主義の嵐が吹き荒れていた。だが、予科の寮生活には「教養主義」の名残があり、比較的自由だった。

いわゆる「紀元2600年」といわれた年に、なぜこの学館が大学に昇格させられたのか。私は一度も公文書でその理由を調べたことはない。あえて推測すれば以下のような理由ではなかったのか。この大学の目的は、従来の神職養成の枠をこえ、天皇中心に形成された日本古代の政治、宗教、文化に関する研究、つまり「皇学」研究の質を高め、研究の過程で、学生の「皇民」意識を豊かに育て、日本的な知識人をつくる。そして、その知識人を広く植民地を含む国家活

動の各分野に供給しようとするにあったのではなかろうか。だが、予科生になった私たちには、こんなことはどうでもよかった。

しかし、この設立理由とは別に、戦後の世間がこの大学をみる眼は、天皇制の復活をはかる人々をつくってきた無気味な学校だというに尽きる。京大教養部の教授でさえ、私の出身校を問い、私が神皇大予科だと答えると、即座に「おゝこわ（恐ろしい）」と言ったことが、何よりの証拠だと私は思っている。

しかし、学生や予科生たちは『倉田山日記抄』の正井氏がいったように、「新らしい学究の自由性を求めて鋭く在来の母胎（神宮皇学館）を止揚してきた」のである。予科の私たちも、自主的に哲学同好会や文学同好会をつくり、広く西洋の哲学や文学的教養を身につける努力をしていた。それも「学究の自由」をめざしていたからであった。

予科の教育をその授業を中心にみると以下のようなものであった。学科で最も重視されたのは、将来の研究に不可欠な語学、とくに独乙語、ついで英語だった。東大出の若い助教授が2人、旧制高校への対抗意識をもって熱心に教えてくれた。おかげで予科の独乙語の水準は高く、『倉田山日記抄』の正井氏など、予科3年生のときに、助教授の翻訳の下訳をしていたほどである。英語は中年の教授が2人。1人は西洋史の兼任だ。英語は週2時間、独乙語は週4時間であった。

語学の次に重視されていたのは、歴史よりも国語、国文である。これも将来のため、古典の読解力を養う必要があったからだ。しかし『古事記』や『日本書紀』など難解なものではなく、せいぜい『徒然草』、『平家物語』程度であった。教授は2人。1人はロマンチストで週に1回作歌も担当していた。

歴史は日本史、東洋史、西洋史で、何れも古代史が中心である。私は教授が好きで東洋史に興味をもっていた。姓名は三田村泰助氏。大学きっての学究で、自由主義者といわれていた人である。神皇大廃止の後は、立命館大学で教鞭をとっておられた。

昭和18（1943）年9月文系学生の徴兵猶余がなくなり、全学が悲壮感に包まれていたとき、三田村氏は私たちに、「君たち学徒の尽忠報国は、直ちに武器をとって戦うことではない。時が許す間は、命がけで学にいそしむことである」と懇々とさとされた。次にのべる学長とはずい分ちがうという印象をうけた。

予科の授業はこんなもので、とくに神皇大予科の特色はみられない。予科教育の特色はむしろ正科の教育以外のところにあった。1つは学長山田孝雄氏の存在そのもの。他の1つは予科の寮生活に課せられた寮の行事だったといっていい。

山田学長は日本文法学、文献学の権威であり、学界の重鎮だった。しかし、彼自身は国学者を以て自ら任ずる国粋主義者で、正真正銘の尊皇愛国主義者であった。彼は式典のたびに「国体」についていろいろ訓辞した。

学徒出陣の壮行会での訓辞をみても、それは明らかである。学長は「国家悠久の生命、死して死せざる日本国民の生命」などと語り、最後に出陣学徒に向って「諸君よ生きて帰ると思い給うな」と激励した。この神がかりな訓辞に共感し、学長の思想に感銘する予科生もかなりいたはずである。それもあの時代では不思議とはいえなかった。

次に寮の行事というのは、寮生と伊勢神宮との関係の緊密化である。それは日曜日以外、毎朝（6時）、寮の遙拝殿で行われた全寮生の伊勢神宮遙拝と、月に1度2人1組で神宮に参拝する「早朝参拝」である。

毎日の遙拝と月に1度の参拝を、2年間（後半年は工場での勤労奉仕）も続ければ、自然に神宮への畏敬の念も高まるだろうし、寮生の神

宮に対する精神的な距離も近くなる。それは当然神宮の祭神天照大神の子孫である天皇に対する尊崇に連なる。さらにいえばこのことは予科生にとって、「皇学」研究の徒だという自覚をいだかせるにちがいない。これこそ神皇大予科の教育なのだ。多分、大学当局は寮の行事に、こんな期待をよせていたであろう。

しかし、これが成功したかどうかは別の問題である。私の親しい友人であった或る予科生は、寮の自室の柱に数珠を掛け、公然と自分が仏教信者であることを宣言していた。この友人の場合、信仰の自由が、当局の奨励する神宮崇拝に勝ったのだ。予科の生活に残っていた「教養主義」のたまものだったといえるかも知れない。

この友人は私たちが予科3年生のとき、病気で帰省していた私に葉書をくれた。その葉書には恐ろしいことが書かれていた。曰く「古事記を読んだ。皇室の罪悪史（親子兄弟の権力争いの記事が多いことをいう）だ。いやになる」と。昭和19（1944）年のことである。もしも特高の刑事にでもみつかればと思うと私はぞっとした。その後友人に注意したら、はじめて気がつき、真っ青になっていた。神皇大の予科には、こんな人間もいたのである。予科の教育を書くのに、つい余計なことを書いてしまった。

勿論、予科の寮生活では神宮参拝以外に、旧制高校なみの青春乱舞のストームやコンパ、寮対抗のスポーツ、伊勢、志摩の海や山への小旅行などもしばしば行われた。予科の生活はよくも悪くも、私たちの青春だったのである。